

花鳥諷詠®

令和5年11月 ■ 第428号 ————— 目次

花鳥諷詠選集	今橋眞理子	2
	星野 高士	4
この人の作品	山下 幸典	7
一頁の鑑賞	如月 真菜	8
	内藤 花六	9
卯浪		10
虚子研究 『六百五十句』 研究 (45)		11
実作のための俳句研究⑥		
稲畑汀子の世界(2)	青木 亮人	18
カレンダーこぼれ話②		25
書評		26
新刊紹介		28
風報		30
地区行事開催日程表		31
編集後記		32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

表紙 「ホトトギス」大正4年6月号より。小川千堯画「ごんどら」。

花鳥諷詠選集

今橋眞理子 選

特選五句

海風に扇の風をたたみけり

横浜久保理江

少年のもう手花火に加はらず

加古川岩城久美

菩提寺へ一段ごとの残暑かな

岡山岩崎正子

降りて来る闇待つことも地藏盆

柏渡辺彰子

出来たての重さの匂ふ新豆腐

習志野大慈弥爽子

二句短評

一句目——「たたみけり」という詠嘆によって、狭い空間の「扇の風」から「海風」へと景が広がる。季題である「扇」によって「海風」は夏の風となった。切れによる連想の広がり、調べは、散文ではない韻文の俳句の妙でもある。

二句目——子供は手花火が大好きで、殊に何人か集まると大騒ぎになるが、ここに描かれているのは、ちよつと大人びた少年の姿である。幼い頃から、その成長を見守ってきた作者のまなざしが手花火の火色のように優しい。

入選六十句

旅の夜の始まるワイン灯涼し 米子 遠藤 裕子

湖風の煽りし楽譜夏ゆふべ 鳥取 和田田鶴子

青空を銚一番が動き出す 京都 中島 慶雄

百の音に包まれて売る風鈴屋 能美 北 重子

割竹を水に宥めて銚回し 八尾 米澤 悦子

暮しの灯わづかに点り星月夜 西脇 岸本 悦子

禅定の粥の白さや朝曇 京都 本谷眞治郎

まだ蟬の声の揃はぬ朝かな 東京 荒井 桂子

夕虹や余生俳句と共にあり 小平 青木美代子

光年を三瓶にをさめ星月夜 神戸 鳥崎すずらん

柏手に微かな湿り夏祓 奈良 堀田 建夫

緑蔭の時を忘るる風のあり 金沢 村本寿美枝

竹筒のコップあたらし撫清水 高崎 津久井洋子

花合歡の閉ぢて山家の灯のうるむ 大牟田 鹿子生憲二

星よりも飛機の瞬き月涼し 八千代 向阪 由紀

川波に鮎の一閃走りけり 松原 加藤 あや
遠景に滝一本の棒のごと 久留米 野口 桂子
竹の癖見極めながら団扇貼る 高知 森脇 杏花
合歓の花車窓すれく三瓶まで 東京 齋藤 澄子
実直に生きてる父の墓洗ふ 福島 遠藤 里乃
梅雨明の近し恙の友如何に 小松 橋本 正乃
蟬ひとつ見えぬ大樹の蟬時雨 高知 駒木 基克
三尺の花火我が家を揺さ振りぬ 長岡 林 惣峰
青空を重しと思ふ炎天下 大牟田 西坂美也子
路地奥の空を狭しと揚火花 金沢 瀬古 祥子
万緑の吸ひ込んでゆく鐘一打 福山 世良 正子
七夕や曾孫の筆に手を添へて 福岡 三坂 一生
対岸の嶺々に湧き立つ雲の峰 島原 柴田ちぐさ
独り守る築百年の家涼し うきは 宮崎みゆき
喪ごころにいつまで触るる秋の蝶 鹿児島 平山 洋子

炎天下引き返すには来すぎたる 高松 高橋 遥
水暮れて郡上踊りの佳境なり 下関 岡本 恒子
稻妻や海一望のカフェテラス 大川 中原南大喜
流灯を預ける水のひたと受く 高知 明神 佳子
漆黒の湾を縁取る灯涼し 白山 大橋美代子
突堤に散らばつてゐる火花屑 大阪 山内 藪彦
蟬しぐれ今日の一步を踏み出しぬ 高松 福家 敬子
端居して夫在りし日を沁み沁みと 上越 橋詰シズエ
鐘楼の高さにありて新松子 朝来 枚田登志子
ねむの花山深ければ色深く 刈谷 境 雅代
遠泳の子の点景となりゆけり 高松 大山 孝子
夭逝の父との時間墓参 金沢 森田 康夫
旅先に買ひし夏帽少し派手 芦屋 長安 悦子
深吉野の宿に寝をしむ星月夜 堺 杉山千恵子
新盆や母の育てし花供ふ 長岡 佐藤 文子

● 星野高士選

特選五句

蟻の道続く限りを道として

出来たての重さの句浜松富山新豆腐實子

少年のもう手花火に加はらず習志野大慈弥爽子

帯塚に湧き立つ如し加古川岩城蟬の聲久美

九十年生きて最も暑かりし太宰府江里口幸生

熊本渡邊佳代子

二句短評

一句目——写生句のいいところは作者の見ていることと読者の共有部分が多いか少ないか。もちろん多い方がよいのであり、この一句もかなり視野がひらけてきたのである。そして何より人間の生きる方向性も裏に秘めている。

二句目——普通この季題は掬うとか、食べるとか表現されるのが見かけられるが、この作品はいかにも新豆腐のしっかりした物の姿が見えて来た。「重さの句ふ」も斬新であり、美味そうに思った。食感の美をよく表現してくれた。

またたきに深む追慕や星月夜 神戸明石裕子
 甘味屋に男一人の心太袋井湖東紀子
 健やかに迎ふる卒寿月涼し 福山杉原芳子
 汀子師の褪せぬ面影盆の月 高松和泉金子
 数式の解け少年の夏終はる 大阪ふじもと言葉
 山霧の中の明るく視界零 市川拔井諒一
 不自由の中の自由やハンモック 高松宇和川厚
 生涯の花鳥諷詠生身魂 摂津小西真子
 帰省子に聞きたきことの二つ三つ 福山内田千年
 神の池花藻明かりとなりにけり 鹿児島角屋敷昭子
 バス停は陰ひとつ無く田水沸く 伊賀西澤与志子
 おいそれと返事のできぬ暑さかな 山形加藤わか子
 踊子のひとりばかりを見てをりぬ 高知長田貴代
 受付に並んでをりし浮輪の子 静岡小泉荒太
 短冊をはみ出す願ひ星祭 松江山根正巳

入選六十句

遠花火山を心を揺さぶりぬ 四圍史 豊田 耕造

柏手に微かな湿り夏祓 奈良 堀田 建夫

仏心の生る端居となりにけり 泉大津 多田羅初美

玉砂利の音に明けゆく朝ぐもり 高槻 林 曜子

打水に路地を溢るる日の匂ひ 神戸 玉手のり子

昼間とは違ふ顔して浴衣の子 米子 中村 襄介

浴衣着てみな若返る同期会 秋田 岩谷 塵外

配られし団扇を帯に差し入るる 白山 岩本 松江

蟬ひとつ見えぬ大樹の蟬時雨 高知 駒木 基克

街盛夏抜け山寺に憩ひけり 浜田 高村美都子

俎板の音に目覚むる帰省かな 高知 片岡 幸枝

もう少し待つてみようかメロンの香 鳥取 井上登志枝

江ノ島の宿に戻りて灯涼し 枚方 高木 雅恵

荒梅雨やブルーベリーは熟れてをり 大牟田 藤木多美子

碧潭へ紅をこぼして合歓の花 加賀 正藤 宗郎

水暮れて郡上踊りの佳境なり 下関 岡本 恒子

山荘の朝の訪問兜虫 松山 篠原みどり

邂逅の話遮る行々子 福山 池上 幸子

漆黒の湾を縁取る灯涼し 白山 大橋美代子

空蟬や宮の名木栖とし 岡崎 新家 正美

西瓜にも器量不器量ありにけり 鯖江 山岸世詩明

平らかな風のわたりて青田かな 神戸 平尾 孝子

ブレーカー落し去りたるはたたがみ 久留米 矢野 愛子

鐘楼の高さにありて新松子 朝来 枚田登志子

麦酒飲む忘れたきこと泡にして 福岡 大石 靖子

一区切りつきしと思ふ秋立つ日 久留米 谷川 章子

土用波観音岩に舞ひ上がり 東京 不破 澄子

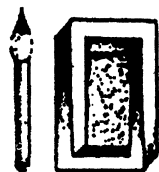
風鐸の微動だにせぬ油照 太宰府 白石 照子

降りて来る闇待つことも地蔵盆 柏 渡辺 彰子

旅先に買ひし夏帽少し派手 芦屋 長安 悦子

草の中より赤のまま色弾く 高知 河野 紅柳
 断崖に浮かぶ灯台岩燕 倉敷 鴨井 愛子
 山鉾や人の背丈の車輪ゆく 神戸 足立 朱麻
 土砂降りの雨に戸惑ふ蝸牛 島原 西田 正剛
 六甲の稜線潰し梅雨に入る 高松 真鍋 孝子
 十年後語りて歩く夏夕 鹿児島 手打 桃果
 秋暑し心落着くまでもなく 東京 山本 春樹
 海神を呼ぶ神主や海開 香川 佐藤美沙子
 虫の夜の入口となる出口かな 所沢 木村 佑
 里山のどこ歩いても虫の声 上越 藤井 敏子
 アステカの赤土の像蟬時雨 横浜 守谷 一劍
 いつまでも汀離れぬ夏の蝶 伊賀 池本 準一
 風向きの少し和らぐ晩夏かな 大野城 稲岡とみ子
 ひたすらに喜雨待つ心我農婦 岡山 荒木 絹江
 足元に割れんばかりの蟬の声 横浜 夏野 猫宙

盆の月思ひ通りにならぬこと 大阪 今村久美子
 受付に並んでをりし浮輪の子 静岡 小泉 荒太
 ランタンの照らす語らひキャンプの夜 奈良 河村久美子
 気休めと知りつつ今日も水を打つ みやま 海谷 育男
 靡くもの多くなりゆく野路の秋 倉敷 江原由美子
 新涼や学ぶ楽しさ戻り来る 名古屋 宮沢 素流
 靴底の道に貼りつく炎暑かな 三田 吉村 玲子
 走馬灯回る影絵もなほ虚ろ 神戸 宮代 鎮雄
 ガス栓を閉めて閉店盆の月 東京 寺崎三枝子
 語部の途切るる声や原爆忌 神戸 長谷 元子
 草市や雑踏に聞く祖母の声 浜田 池田由紀江
 人類のルーツは同じビヤホール さいたま 後藤 光風
 明日といふ荅を控へ牽牛花 東京 田辺て津子
 無人駅下りて四方へ散る日傘 福岡 工藤 友子
 秋風のすべる八尾の石畳 千葉 駒井ゆきこ



編集後記

初時雨これより心定まりぬ

虚子

昭和十八年初冬の句。ドイツの対ソ戦敗北は決定的でキエフが解放され、日本では山本五十六を失い、学徒出陣・工場労働・疎開の準備といった動きがあった。ベルリンでは空襲が始まっていたからだが、翌年秋から四年も小諸に疎開することになるとは、虚子も予想していなかったろう。国内は厳しい情報統制下にあった。

○青木亮人さんのオンライン講座の活字化は、汀子俳句の生い立ちを虚子の

句日記に見据えた注目すべきお話です。戦中戦後にも日常を詠んだ虚子の世界をいかに受け継いだか、俳人として、伝統俳句の伝道者としての稲畑汀子の本質を見る思いがします。

○協会賞の締め切りが迫っております。目標を設定するだけで、俳句生活は変わります。緊張感が生まれます。

○オンライン講座の受付はまだ行っておりません。ライブの終わった十月分は録画を配信いたします。

○来年二月の国際俳句シンポジウムは、オンライン配信も致します。地に足のついた伝統俳句の営みの「価値」を、不安定な現代の視点から考えていきます。関連して、国際俳句協会では左記の俳句大会&講演会が催されます。

日時・十二月八日(金) 十三時〜

場所・アルカディア市ヶ谷私学会館

(JR・地下鉄市ヶ谷駅最寄り)

講演・能村研三(俳人協会理事長)

演題・「私の国際交流」

会費・五千元(軽食付き)

申込・国際俳句協会事務局

TEL 03-52228-9004

FAX 03-52228-9007

○協会のカレンダーも、俳句を通して発見できる日常への通路が凝縮されています。(井上泰至)

花鳥諷詠十一月号(通巻第四二八号)

定価一、〇〇〇円 但し、本代は年会費を含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和五年十一月一日

発行人 岩 岡 中 正

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151-0073 東京都渋谷区笹塚二-18-9

シヤンプル笹塚二-B-01

電話 〇三三四五五一一九一

FAX 〇三三四五五一一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一七〇一七二八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112-0014 東京都文京区関口一-一九二